

〔海外事情紹介〕

現代シェフィールド事情

鈴木 博実

昨年4月から今年の3月までの1年間、2004年度長期在外研究により、イギリスのシェフィールド大学に滞在させて頂きました。本稿はその滞在記であり、現在のシェフィールドおよびその周辺の様子を紹介したいと思います。シェフィールド大学は明治大学の海外協定校の1つであり、私より以前にも多くの方が在外研究で滞在したり、また毎年8月に学生が語学研修として訪問したりして、多くの情報が伝わっていますが、私なりに感じた点について述べさせていただきます。一方的な見方になっている部分もあるかと思いますが一読して頂ければ幸いです。

シェフィールド (Sheffield) は大ブリテン島のほぼ中央部、South Yorkshire 南部の内陸部に位置する人口50万人の都市で¹⁾、マンチェスター (Manchester) の東、リーズ (Leeds) の南、ダービー (Derby) の北といった位置関係にあります(図1)。ロンドンの主要ターミナル駅の1つであるセントパンクラス (St. Pancras) 駅から直通の高速列車（完全には全線電化されていないのでディーゼル機関車が牽引）を利用すると2時間半で到着します。シェフィールド方面に向かう列車はほぼ1時間ごとに運転され、ほとんどがシェフィールド行きとなっているので、車内での放送を聞き逃しても降り損なう心配はありません。シェフィールドは三方を丘で囲まれ6つの川が流れ込む坂が多い町です。市の中心部および東側が最も低く、他の方向、特に西側はイギリスで最初に指定された国立公園、ピークディストリクト (Peak District) に向かって坂が続きます。シェフィールドでは16世紀からナイフやハサミ、鎌といった刃物生産が始まり、現代でも代表的な産業となっています。ちなみに市内に本拠地を置くフットボールチームの1つ Sheffield United の愛称は刃を意味する Blades となっています。

私たち家族が1年間住んだ地域はピークディストリ



<図1>

クトに向かう途中に位置し、シェフィールドの西端にあたります。市の中心部から4kmほどの距離ですがひたすら登り坂となっており、中心部との標高差は200m程度ありました。すぐ近くに大学に向かう路線のバス停があったので大学に通うのは比較的楽でした。しかしながら7月の終わりから8月の頭にかけて行われた2週間のバスストライキの際には、他に交通手段がないので毎日往復歩くことになり、特に大学からの帰りはかなり辛い思いをしました。この地域を選んだ理由は、今回特にお世話になった Peter Willett 教授より「住む場所は市の西か南西部に下さい。治安がいいから。」というアドバイスを受けていたからです。借りた物件はフラット Flat と呼ばれるアパートで間取りは2LDKでした。本当は2軒の家が1つの壁を共有するように造られ、それぞれ専用の庭が付いているセミデタッチドハウス (semi-detached house) と呼ばれる物件が良かったのですが、残念ながらイースター直前には家具付きでそのような物件は見つかりませんでした。このフラットは偶然にも Willett 教授の自宅から歩いて5分

程度しか離れていなかったばかりか、竹本先生が在外研究でシェフィールドに滞在されたとき借りられていた家からも 100m 程度しか離れていませんでした。不幸にも竹本先生は泥棒に入られてしまったわけですが、Willett 教授は「この地域では、過去 10 年間で泥棒は 1 件しかないからとても安全だ。」とおっしゃっておいしました。その 1 件というのがひょっとしたら竹本先生の件だったのかもしれませんが。ただ安全といっても、十分注意すればという前提条件付きです。全ての家には当然のように防犯アラームが設置されているし、車を路駐する際にはハンドルをロックするための棒を取り付けているし、車上荒らしを避けるためにカーステレオは取り外していました。幸い、私たちは 1 年間盗難などには逢わずに済みましたが、フラットの敷地内で数台離れて駐車していた BMW は車上荒らしに遭ってしまいました。

ピークディストリクトは標高がせいぜい 600m 程度しかなく山というよりもちょっと高低差のある丘陵地帯といった所です。その地形の特徴はムーア (Moor) と呼ばれるヒース (Heather) の生えた荒れ地とデイル (Dale) と呼ばれる谷から成り立っています。このピークディストリクトは南部のホワイトピークと北部のダークピークとに分けられます。ホワイトピークと呼ばれるあたりには石灰岩が多くみられ、その中心地であるバクストン (Buxton) はイギリス産ミネラルウォーターの代表ブランドの 1 つになっています。一方ダークピーク内にはハイキングコースや鍾乳洞で有名なキャッスルトン (Castleton)、昔の町並みを残しておりベイクウェルプディングというお菓子の発祥地としても有名なベイクウェル (Bakewell) と言った町があります。これらダークピークの町はシェフィールドから車で 20 分ほどの距離なので気が向いたときに出かけ散歩などをしました。このピークディストリクトにはハイキング、サイクリング、あるいはクロスカンントリーやロッククライミングのトレーニング等といったアウトドアスポーツのためだけではなく、観光のためにも多くの人がやってきます。ベイクウェルの近くには、約 450 年の歴史を誇るデボンシャー公爵家の屋敷であるチャッツワース (Chatsworth)²⁾ やバラがすばら

しいハドンホール (Haddon Hall)³⁾ といった貴族の館、またそのすぐ南のマトロック (Matlock) には世界遺産に指定されている水力を利用した世界初の工場スケールでの紡績工場の跡地⁴⁾ (写真 1) およびほぼ同時期に



＜写真 1＞

建設されて現存する紡績工場などもあります。この紡績工場の跡地には当時の建物の一部と水車を設置してあった水路、それと従業員用の宿舎として利用されていた建物がありました。世界遺産ということでかなり期待していたのですが、残念ながら私たち家族にとってはあまり興味を引く対象ではありませんでした。しかしながらイギリス人と思われる多くの見学者が絶え間なく次々に訪れて一生懸命にガイドの説明を聞いていたので、彼らにとってはかなり興味を引く対象だったのでしょう。もちろん、イギリス人全員がこのような建造物に興味を持っているのではなく、興味を持っている人だけが見に来ているからこそ熱心に説明を聞いていた、というのが正しい解釈だと思います。さらによく言われるイギリス人の古いものを大切にするという気質が歴史的建造物に対して高い興味を示すこと背景にあるのかもしれません。

シェフィールドから車で南東に 1 時間ほど行ったノッティンガム (Nottingham、知り合いのイギリス人はノティダムと発音していました) の近くにはロビンフッド (Robin Hood) が活躍していたとされるシャーウッドの森 (Sherwood forest) があります。大部分の土地が牧草地や麦畑となっているイギリス中央部において、幹の周囲が 5 m を越えるような巨木を目にする

ことはめったにありませんが、このシャーウッドの森には樹齢 500 年を越えるそのような巨木があちこちに生えています。このような巨木には頻繁に落雷が落ちるためなのか、多くの木は幹が途中で折れてしまったり縦に半分に割れていたりして、そこに森の精がいるのではないかと感じさせ、この森に対する畏敬の念を抱かせます。そのような巨木の森のシンボルと言える木がメジャーオークと呼ばれる巨木（写真 2）で、



＜写真 2＞

2002 年にエリザベス女王即位 50 周年を記念して選定されたイギリスの偉大な 50 本の木のうちの 1 本に選ばれています⁵⁾。幹の周囲は 10m くらいあり、根元の土が踏み固まられるのを避けるためにこの巨木の周囲は柵で囲まれていました。また広く横に広がった枝は自らの重みで下がり途中で折れてしまう可能性が高いので、下から支えられています。このような巨木が生えている森が今でも残されているのは、中世の頃からこの地域では人々が森を守る努力をしてきたからであり、そのような人々の代表がロビンフッドだったわけです。実際にロビンフッドが存在したかどうかについては議論の余地があるようですが、ロビンフッドのような人々がいたのは事実でしょう。このシャーウッドの森では毎年 8 月上旬に一週間に渡りロビンフッドフェスティバルが開催されます⁶⁾。ボランティアの人々がロビンフッドの時代の生活様式を再現したり、劇や中世の騎士の戦いを再現したショーやアーチェリーの試射、講演会等が開催されていました。このうち野外の小さな広場で行われた劇はとてもユニークで、なんと

劇を演じるのは見に来ている子供たちでした。進行係の人が各役について立候補を集うと、子供たちは我先にと争うように手を挙げます。メインの役が特に人気があるというわけではなくほぼ全ての役に手が挙げられます。それもお姫様役が男の子だったり、騎士が女の子だったり日本では考えられないような配役でも平気で、中には 2 つ以上の役に手を挙げる子供までいました。おそらくこのショーは自分達が演じるということを知っていて来ているのだと思いますが、その積極性には圧倒されました。またプロの役者がロビンフッドや敵方に扮して馬に跨がり槍で的を突いたり戦ったりするショーでは、ロビンフッドやその仲間役に対しては声援を、敵役に対してはブーイングを浴びせるなど、大人も含めて観客はショーを盛り上げており、なかなか日本ではここまでできないなと感心してしまいました。とにかく小さい頃から積極的にショーや劇に参加し、単に見るだけではなく自らもそのショーや劇の一部となって楽しんでいることがよく判りました。

このシャーウッドの森からさらに南に車で 1 時間ほどの地点に万有引力を発見したニュートンの生家（写真 3）が保存されており、現在はナショナルトラスト



＜写真 3＞

が管理しています⁷⁾。ニュートンは小さな荘園領主の家に生まれたものの、農作に対する素質がない代わりに学業に対しての素質があったおかげで科学者への道を進むことになったわけですが、ペストを避けるためにケンブリッジからこの生家に戻っていた 1 年ほどの間に微積分学、万有引力、色彩論の基礎を築きました。リンゴが木から落ちるのを見て万有引力を発見したと

言われていますが、この発見はリンゴの木が当たり前のように植えられていた生家にいたからこそもたらされたと言えるわけで、もしケンブリッジで研究していたならば、あの大発見はなかったかもしれません。そのリンゴの木は350年以上経った今では残っておりませんが、そのリンゴの木の直系とされる木が現在生家の庭に植えられており、シャーウッドの森のメジャーオークと共にイギリスの偉大な50本の木のうちの1本に選ばれています⁵⁾(写真4、5)。しかしながら、あ



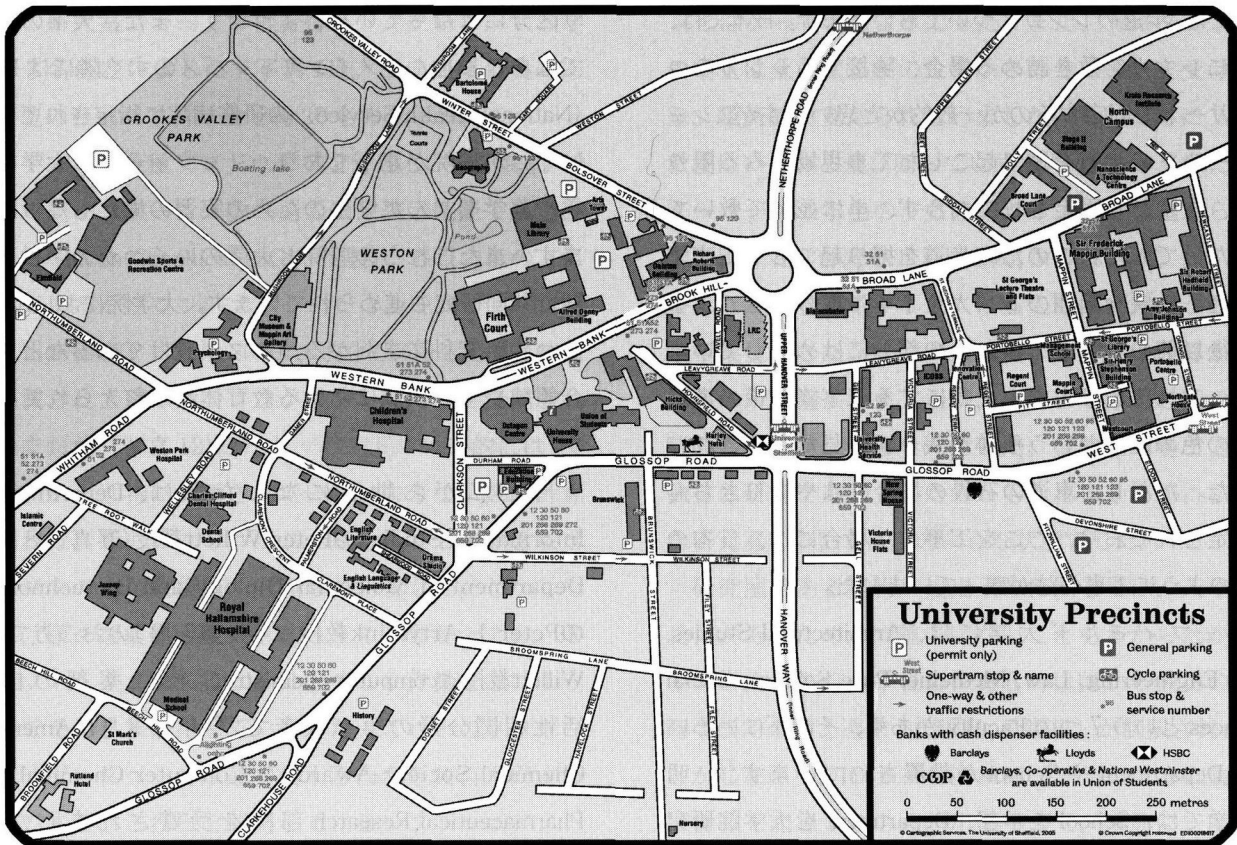
<写真4>



<写真5>

るがままの姿をなるべくそのままの形で残すという考えなのか、イギリスでのリンゴ生産に対する考えなのかはよく判りませんが、まったく剪定されておらず、細かい枝がぎっしりと詰まっていました。ニュートンの生家の納屋の一部は、Science Discovery Centreと名付けられ、ニュートンが発見した原理や法則にちなんだ体験機器が置かれています。薄い石けん水に浸した棒をゆっくりと水平に持ち上げて薄い膜を作りそこに斜めから太陽光線を当てると薄膜がプリズムの役割をして様々な色に分光するとか、摩擦のない水平な台の上で静止している円盤に質量が等しい円盤を衝突させると速度が入れ替わってぶつかった円盤が静止し静止していた円盤が動くとかを遊びを通して子供たちは体験していました。感心するのは単にこのような装置が置いてあるだけではなく、ボランティアの人々(多くの方は退職した方々でした)が装置の傍にいて、どういふところに注目するかアドバイスしている点です。このアドバイスのおかげで子供たちはそれまで気づかなかった点にも注意を払うようになり新しい発見をしていました。小さい頃からこのような体験を重ねていれば、今日本で問題になっている理科離れはもっと少なくなるのではないのでしょうか。

さて、シェフィールド大学(The University of Sheffield)はシェフィールドに2つある大学のうちの1つで(もう1つはシェフィールドハラム大学(Sheffield Hallam University))、市の中心部から10分ほど西に行ったところを中心にキャンパスが広がっています(図2)。シェフィールド大学には外側がレンガ造りの建物が多く存在します。最も古い建物はFirth Courtと呼ばれる建物であり、赤れんが造りです(写真6)。ちなみにイギリスでは「赤れんが造りの9大学」と呼ばれる大学が伝統ある大学とされ、シェフィールド大学はそのうちの1校です。もちろん全ての建物がレンガの外壁をもつわけではなく、コンクリートの壁が剥き出しで日本でもなじみのある外観の建物もいくつかあります。しかしながら比較的新しく建てられたように見える建物についてもレンガの外壁で作られたものもあります。私が滞在した研究室があるRegent Courtもそのうちの1つで、濃淡2色の茶色のレンガでモダンな感じを演



<図 2>



<写真 6>



<写真 7>

出しています(写真7)。イギリスの住宅においてよく目にする一軒家(Detached house)やセミ-detachedハウスでは、ほぼ100%外壁はレンガですし、現在建設されている住宅についてもまずレンガ作りです。このようにイギリス人にとって家の外壁はレンガというのが当たり前になっているので、大学の多くの建物についてもレンガを採用しているのかもしれません。古い

建物を造り直す場合、全て取り壊してしまう場合もありますが、外のレンガの壁はそのままにして作り直す場合もありました。最初から、作り直しが可能なように設計されているのかもしれませんが、レンガだと再利用するのが比較的簡単なのかもしれない。またイギリスではまったく地震の心配がないというのもレンガが使われる大きな理由でしょう。レンガの再利用とい

う点では、歩道のレンガについてもいえます。日本では、歩道にレンガを敷き詰める場合、隣接するレンガをコンクリートで固定するのが一般的かと思いますが、シェフィールドの歩道を掘り起こした工事現場をみる限りでは、まったく固定されておらず、単に並べて敷いてあるだけでした。このため歩道を掘り起こして工事する場合、必要な範囲のレンガを丁寧に取り除き、工事終了後以前のレンガをまたその部分にはめ直していました。これだと日本でよく目にする工事終了後の道路表面の色の違いという痕跡が残らず、見た目がきれいでした。ただし、車道の石畳の場合にはやはりきちんと固定されており、ここを工事した場合には、日本の場合のように工事の跡が残っていました。

シェフィールド大学には、Architectural Studies, Arts, Engineering, Law, Medicine, Pure Science, Social Sciences という7つの Faculty があり、その下にいろいろな Department や School が設置されています⁸⁾。明治大学では、School を学部、Department を大学院研究科の意味で使い分けしていますが、シェフィールド大学では、Faculty が学部、School も Department も学科に相当していますが、School と Department の使い方の違いはよく判りません。また1つの Department が複数の Faculty に属していることもあり、完全な縦割りとい

う区分にはなっていないようです。また、大学の付属ではありませんがメインキャンパスのすぐ隣には NHS (National Health Service) の研修病院に指定されているいくつかの病院が建っており、シェフィールド大学で歯学や薬学を学んだ学生のための実習の場ともなっています。またこれらの病院と大学のいくつかの学科との間で共同研究も進められています。大学院においても、2つの研究科にまたがるコースが設けられているなど、複合領域や境界領域における教育体制が整えられています。

今回私がお世話になったのは、Department of Information StudiesのPeter Willett教授(写真 8)と、Department of Molecular Biology and BiotechnologyのPeter J. Artymiuk教授(写真 9)のお二人です。Willett教授はcomputer chemistry、特に薬剤の構造活性相関分野の第一人者で、今年の3月にAmerican Chemical Society Award of Computer Chemical and Pharmaceutical Research 部門を受賞されました⁹⁾。Artymiuk教授はタンパク質のX線構造解析の専門家であり、Willett教授との共同研究で立体構造の相同性検索システムの開発、タンパク質のサブユニット間の結合部位の特定、膜タンパク質の構造決定等を行っています。



<写真 8>

私が滞在した Willett 教授のグループが利用している研究室は、Royal Society と Wolfson Foundation からの補助金により 1997 年に再整備され、Willett 教授の先生である Michael F. Lynch 教授に敬意を称し The



<写真 9>

Michael Lynch Research Laboratory と名付けられています(写真10)。常時この研究室を利用していたメンバーは、Willett 教授の他に研究者 6 名、ポスドク 1 名、ドクターコースの学生 8 名で、それ以外に時々やってき

てこの研究室でデータ解析を行うドクターコースの学生が3名ほどいました（写真11）。この部屋の奥にある大型のサーバマシン上で約20名のワークステーションのデータや各種ソフトウェアを管理し、さらに約10台のワークステーション（全て画像表示性能では定評があるSilicon Graphics（SGI）社製）、各自の机の上に置いてあるパソコン（オペレーションシステム（OS）はWindows XP または 2000）、および OS としてLinuxが掲載されているパソコンがネットワークで接続されていました（写真12）。ただ、ハードウェア的には4、5年前からは特に更新されていないようで、数値計算であれば、新しいパソコンにOSとしてLinuxを載せたマシンの方が数段早く処理していました。しかしながら、様々な薬剤活性データベース、検索ソフト、3Dグラフィックソフト等はSGI上でしか作動しないようなのでそのまま使用していました。これらのソフトウェアやデータベースは通常数十万円から数百万円する商品ですが、これらを開発しているソフトウェアメーカーと共同研究を行うことにより、かなりコストダウ

ンをはかっているようでした。また、ドクターコースの学生は全員どこかの企業からのサポートを受けており、経済的に支えられていました（そのためにWillett教授はいろいろ飛び回っていましたが）。8名いたドクターコースの学生のうち、イギリス以外の国からの留学生は3名（台湾系アメリカ人、フランス人、インド人）でした。残りのイギリス人にしてもほとんどが他の大学卒業生でした。マスターコースの学生は5月から6月頃に研究室にいましたが、それまでは週2回の演習時間にしか見かけませんでした。普段他の場所で何か独自に研究を進めていたのかもしれませんが、私がいた研究室については上のような状態でした。

研究室のある建物への出入りに関しては、入り口に受付があるためか（誰もいないことも多かったが）日中は自由であり、平日の夕方6時以降から翌日の朝8時半までの間と週末（土曜日、日曜日）が制限されます。しかしながら、IDカードはMICカードのように磁気的に情報を記録することが出来るので、事前に一度事務に行って使用したい入り口を申請しておけば、農学部



＜写真 10＞



＜写真 11＞



＜写真 12＞

と同じように建物の入り口（道路に出るための門にも）にあるカードリーダーに ID カードを通していつでも内部に入ることが出来ます。研究室の入り口のドアは通常の鍵であける方式で、鍵は研究室を管理している人からコピーをもらいました。農学部と違う点は各研究室に防犯アラームが備え付けてあることです。警備の開始および解除は暗証番号の入力で行い、最後に帰る人がセットし、朝一番に来た人が解除します（しかしながらこの防犯アラームも万全ではなく、他の建物では一度週末に泥棒に入られパソコン等を盗られていました）。夕方 6 時以降や週末に研究室を利用する際には、事前の届けは必要ありませんでしたが、受付にあるノートに名前、使用する場所、入出および退出時を記入するようになっていました。学生はこのノートへの記入はいい加減のようでしたが、研究者は比較的まじめに記入していました。これは夜間や休日に建物を利用するための全学的なセミナーの受講とその内容をチェックするペーパーテストが義務づけられているからかもしれません（セミナーは各部署の担当者が、テストの採点は大学の警備管理部門が行う）。正式にはこのテストをパスしてからでなければ夜間や休日に研究室に残ってはいけないということでしたが、このセミナーは年に 1 回しか開催されなかったもので、私の場合はセミナーが開催されるまでは特例的扱いしてもらっていました（なおセミナーは結局 10 月頃受け、テストも無事パスしました）。

シェフィールド大学には職員がいるコンピュータールームが 5 か所（3 か所はフルタイムで、1 か所はパートタイムで職員が在室する IT センター、残り 1 か所は中央図書館（Main Library））以外に、16 の建物内に 23 の無人コンピュータールームが用意されており¹⁰⁾、学生は自由にコンピュータを利用できるようになっています。使用方法としては、電子メールやインターネットを利用した様々な検索以外に、レポートの作成等でも利用できます。全てのコンピュータールームを見たわけではないし、利用時間帯も限られていたので正確なことは判りませんが、昼間のコンピュータールームの使用率はほぼ 100% で、大抵席が空くのを待つという状態でした。シェフィールド大学ではコンピュータールーム

や図書館に設置してあるプリンタは全てネットワークプリンタであり、一旦プリントサーバに出力データを送り、それから出力するプリンタを選ぶようになっています。このプリンタからの出力は有料になっていません（図書館でのコピーと同一料金で、A4 白黒 1 枚 5p（約 10 円）、A3 白黒 1 枚 10p（約 20 円）、A4 カラー 1 枚 25p（約 50 円））。コピー機やプリンタを使用する前にある程度の金額を ID カードにチャージしておき、プリンタやコピー機に取り付けてあるカードリーダーにカードを挿して出力すると、出力代金が引かれる仕組みになっています。明治大学では、無駄な出力を減らすために、1 ヶ月毎に白黒 100 ページ、カラー 30 ページという制限を設けていますが、もっとコスト意識を高めるためにはこの方式の方がいいのではないのでしょうか。

シェフィールド大学のコンピュータを利用するにあたり、幸いにも私は研究スタッフの一員として登録してもらったので、大学内全体向けの連絡等をメールで受け取ることが出来ました。それらのほとんどが私には関係ない内容でしたが、一般的な連絡手段として電子メールが使われていることが判りました。コンピュータセンターからのウイルスに対する注意といったようなメールだけではなく、水道や道路工事のお知らせや、ある程度まとまった来客があるので該当する日にどここの駐車場を使用しないでくれとか、誰が今度引退するとか、退職者のどなたが亡くなったといったような事務連絡などが全てメールで送られてきます。同じ研究室の人たちがこのような連絡を紙の形で受け取っているところはまったく見なかったもので、このような連絡については既にペーパーレス化されていたのかもしれない。

シェフィールド大学には、メインの図書館以外に、10 ヶ所の図書館があります¹¹⁾。このうち私が利用したのはメインの図書館と、研究室に最も近い St. George's Library の 2 ヶ所です。この 2 ヶ所の図書館も最初の頃、何回か行きましたが、その後はほとんど行きませんでした、というよりもほとんど行く必要がありませんでした。その理由はコンピュータ利用のためのアカウントを貰っていたので、研究室から図書館の様々な

サービスを利用することが出来たからです。明治大学の図書館についてもコンピュータネットワーク経由で WWW-OPAC による蔵書検索や、電子ジャーナルの検索などが可能ですが、シェフィールド大学では、約 6000 種類の雑誌が full text の電子ジャーナルとして利用できます。私が検索したいと思う殆どの雑誌が電子ジャーナル化されていました（発行年の古いものについては、製本されたものを書庫で探しだしコピーしました）。最初の頃は、研究室のパソコンから電子ジャーナルの検索システムへのアクセス方法がよく判らず（通常インターネットを利用するための ID 以外に図書館へアクセスするための申し込みが必要であったがそれがなかなか判らなかった）、図書館に設置してあるパソコンでアクセスし、見つけた文献を図書館のプリンタへ出力していました。研究室のパソコンから文献検索システムにアクセス出来るようになってからは、検索した文献ファイルを一旦自分のパソコンにダウンロードしてファイルとして保存し、そのファイルを研究室のプリンタに直接出力できるようになり、図書館に行く必要がなくなりました。シェフィールド大学の図書館のこの他の電子的資源としては、250 種以上のデータベース、E-books 等もあります。予算の関係上急にここまで充実させるのは無理かと思いますが、明治大学の図書館についてもよりいっそうの電子化を望みます。

イギリスでは、日本に先立って国立大学が独立法人化しており、経営は独立採算性になっています。この独立法人化により、シェフィールド大学では学生定員が現在では 10 年ほど前の約 2 倍になったようです。授業料は EU 圏内出身者に対しては低く押さえています。それ以外の地域からの留学生に対しては約 3 倍と大きな差を設けています。学部によって多少差がありますが、学部でも大学院でも年間授業料は Home (UK & EU 圏内) で約 3000 ポンド (約 60 万円) であるのに対し、Overseas (Home 以外) では約 10000 ポンド (約 200 万円) となっています¹²⁾。2003 / 2004 年度の資料によるとシェフィールド大学には世界 116 ヶ国から約 3900 名 (学部生 1952 名 大学院生 1926 名)¹³⁾ の留学生が在籍しており、この数は全学生数の 17% に相当します (学部生 18000 人、大学院生 5000 人)。これらのデー

タから授業料の負担率を比較すると Home:Overseas = 3 : 2 となります。授業料以外の収入もあるし、EU 圏外からの学生に対する奨学金や様々な経済的サポートにより実質的な負担割合はもっと小さいかも知れませんが、シェフィールド大学は経営面においてかなりの部分を EU 圏外からの留学生によって支えられているといっても過言ではないでしょう。EU 圏外からの留学生のうち半数以上の約 2100 人がアジアからの留学生です。そのうち中国本土から約 700 人、香港から 120 人、台湾から 80 人弱と中国系で約 900 人となり、ヨーロッパ全体からの留学生約 800 人より多くなります。アジアのそれ以外の国ではマレーシアから 600 人弱と中国本土に近い数ですが、インドや日本からは 100 名ちょっとといったところです。シェフィールド大学以外への留学生に対しても同様の傾向があると思われる、町中を歩いていて出会う日本人のように見える人々のほとんどが中国人でした。顔つきや服装等から日本人ではないと判断できる場合もありますが、話している言葉を聞いて初めて区別がつく場合もかなりありました。日本人の私でさえこのようになかなか日本人と中国人の区別がつかないし、中国人の方が圧倒的に多いので、「日本人か」と聞かれるよりも「中国人か」と聞かれる機会の方が多かったです。ただ日本と中国をきちんと区別している人々がほとんどで、日本は中国の一部と思っているような人には幸いにも出会いませんでした。

これだけ留学生がいるので当然なのでしょうが、留学生に対するケアはよくゆき届いています。新しく入学してくる学生はほぼ 100% 学生寮に入ることが出来ます (2 年目以降も希望すれば入っていることができます) し、配偶者や子供たちと一緒に来る大学院生 (特に博士号取得のため) に対しては、希望に添うような物件を探してくれます。私たちの場合には、周囲の様子を確かめてから物件を決めたかったので利用しませんでした。希望を出せば物件を見つけておいてくれたと思います。

入学後の英語の補講は、大学の English Language Teaching Centre (ELT Centre) において無料で受けることができます。このセンターでは単に通常の英語の授業だけではなく、宿題や論文を書く際の手助けもし

てくれます。1月頃でしたが、掲示板に「英語がうまく話せても、うまく英語の文章を書けるとは限らないので、ELT Centre の writing のプログラムに参加しましょう」といった掲示を見かけました。何名くらいの学生が参加しているかよく判りませんが、TA 1名で対応というようなレベルではなく、きちんとした指導がなされているようでした。このような無料のプログラム以外に ELT centre では有料の International Summer School や Academic English Preparatory course などを用意しており、様々なニーズに対応できるようになっています。

イギリスでは家族単位で行動するのが当たり前になっているので、家族でやってくる留学生の配偶者に対しても配慮されています。留学生の妻やパートナー（女性に限定）のために無料の英語教室（週2回、毎回1時間半）や交流を深めるための Wednesday Club for Overseas Wives¹³⁾ が用意されています。英会話は初心者レベルと中級者レベルの2クラスが設けられており、受付時にインタビューを受けてクラス分けされます。Wednesday Club は名前が示すように水曜日の午前中に大学の近くの教会を借りておしゃべりや各国の文化を紹介しあったりする場とのことです。その他に年に2回ほどバスハイクで近くの美術館などにも出掛けてい

ました。もしこのようなクラブや英語教室に妻が参加していなかったら、日中買い物以外には外に出ることもなく家に引きこもってしまい、精神的に参ってしまっていたかもしれません。そんな心配をせずに研究に集中できたという意味で、このような交流の場が果たした役割は考えられている以上に大きなものでした。さらにこのようなクラブや英語教室を通じた女性同士のつながりは、男性間の交友関係の広がりにもつながります。研究室の仲間とはパーティーに招待されたり招待したりして友好を深めることが出来ますが、研究室外の人々とはほとんど知り合う機会がありません。妻の交友関係のおかげで私もこれまで全く縁のなかった方々と知り合うことが出来ましたし、貴重な情報を得ることも出来ました。明治大学が家族で来日する留学生を受け入れる場合には、留学生ばかりではなくその配偶者に対してもぜひ配慮して頂けたらと思います。

最後に、今回の1年間に渡るシェフィールド滞在において、多くの友人を作ることができ、また非常に多くのことを得ることが出来ました。今後この経験を研究および教育活動に生かしていきたいと思っております。この機会を与えていただいたことに大いに感謝いたします。

参考 URL

- 1) <http://www.sheffield.gov.uk/your-city-council>
- 2) <http://www.chatsworth-house.co.uk>
- 3) <http://www.haddonhall.co.uk>
- 4) <http://www.derbyshireuk.net/mills3.html>
- 5) http://en.wikipedia.org/wiki/List_of_great_British_trees
- 6) <http://www.nottinghamshire.gov.uk/robinhoodfestival/robinhood>
- 7) <http://www.nationaltrust.org.uk/hbcache/property82.htm>
- 8) <http://www.shef.ac.uk/departments/>
- 9) <http://cisrg.shef.ac.uk/>
- 10) <http://www.shef.ac.uk/cics/services/network/student/comprooms>
- 11) <http://www.shef.ac.uk/library/>
- 12) <http://www.shef.ac.uk/international/fees.htm>
- 13) <http://www.shef.ac.uk/international/admissions/internat.htm>
- 14) <http://www.shef.ac.uk/ssid/international/families/women.html>

図1. シェフィールドの位置と周辺の都市

図2. シェフィールド大学のキャンパス案内図。Regent Court は図の右側のやや上側で正方形の中抜きになっている建物。Firth Court は丸く見えるラウンドアバウトの左側で、Weston Park のすぐ右側

写真1. 世界遺産の紡績工場跡

写真2. シャーウッドの森のシンボル「メジャーオーク」

写真3. ニュートンの生家

写真4. 「ニュートンのリンゴの木」の子孫

写真5. 「ニュートンのリンゴの木」のプレート

写真6. シェフィールド大学で最も古い建物「Firth Court」

写真7. 中庭から見た Regent Court

写真8. 研究室のメンバー（その1）。筆者の右隣が Peter Willett 教授。Regent Court の目の前のパブで開かれた送別会にて。

写真9. Peter Artymiuk 教授と。写真8と同じ送別会にて

写真10. 研究室のプレート

写真11. 研究室のメンバー（その2）。フラットでのパーティーにて。

写真12. 研究室の様子。クリスマス直前なので天井にデコレーションが。